北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

後記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/8129

後　記

A Postscript by the Editor

本年度、情緒障害教育課程は20周年を迎えました。昭和56年4月、情緒障害教育教員養成課程（1年・臨時課程）が旭川校に開設されて11年ののち、平成4年4月、特殊教育特別専攻科（情緒障害教育専攻）に昇格して9年になります。2001年3月までに、20期生まで277名の修了生を送り出すことになります。全道各地、さらには本州においても活躍の便りが届けられています。

これまでの20年間、情緒課程の運営につきまして、旭川をはじめ、全道各地の方々の絶大なご支援をいただきましたことに、衷心より厚く御礼申し上げます。

振り返りますとき、最初にすべきことは、皆様への感謝です。

まず、子どもたちとご家族に感謝いたします。こころの一番デリケートなところを教えてくださいます。実習、実地指導、実践研究でお世話になった現場の先生方、研究活動の中でお世話になっています地域の方々、関係機関の方々に、いつも現場で生きたご指導ご支援をしてくださることに感謝いたします。お忙しい時間を割いて講義においで下さる講師の先生方に、経験豊富なご講義をいただけることに感謝いたします。修了生もまた、大きな支えをくださり、勇気づけ励まして下さいますことに感謝いたします。また修了生を育てて下さる各地の関係者の方々、修了後こそ大きな育ちの時であることを思いながら感謝いたします。大学のなかでは、本課程を設立し運営に携わり発展にご尽力下さった、開設時の上条雄也主事、歴代の主事、故西　勇先生、故松下　覚先生、兼担教官として学部生の指導に加えて2重の仕事を引き受けられた、小田切　正先生、伊藤則博先生、若原直樹先生、講義を担当して下さっています今川民雄先生、現在もまた兼担教官としてともに運営に携わって下さっています、末岡一伯先生、内島貞雄先生、大崎功雄先生に、感謝申し上げます。

本来ならば、お一人お一人に直接お目にかかって、御礼申し上げるべきところですが、この場をお借りして、あらためて御礼申し上げます。

この間、3期のゼミ長、故畠山三郎太先生、5期生の故梨木和佳先生、11期生になるはずだった故宗石知司氏がこの世を去られました。心よりご冥福をお祈りいたします。

4期に英国のSimon Shields氏、15期に韓国の李揆晩先生が1年間留学されていました。

さて情緒障害教育研究紀要第20号には、学外投稿原稿19編、特殊教育特別専攻科科学生論文12編、学内教官原稿によって構成されています。一つ一つが味わい深いものがあります。

巻頭の古塚正恵先生の実践が、紀要16号17号に掲載させていただいた河島淳子先生の実践に学んだことが分かり、この紀要をとおしてつながれたことに喜びを覚えます。

佐藤満雄先生は、北海道の特殊教育にむけて大胆で新世紀に相応しい提案をされ、私たちへ行動を促しています。高橋　渉先生は新世紀の子ども観として「のびのびが一番」と提言されてます。平元　東先生は、旭川地域における早期乳幼児療育への提言を実態調査をふまえてなさっています。いずれも私たちに地域を豊かにする活動を求めています。松村澄絵先生は、障害児保育活動の中で、絵本読み聞かせ活動に焦点を当てられ、深い経験

の一端を紹介されました。現代だから余計に読み聞かせ、朗読が重要になると思えました。

つづく４編は、通常の小学校の特殊学級、通常学級での実践、高等学校での実践です。小笠原智先生は、特殊学級経営にも通常学級経営の基本は共通であることを、学級の児童の様子を通して見事に示されました。伊藤陽子先生は子ども中心の実践に向けた努力について述べられ、山中佐喜男先生は、今の時代にこそ学級経営に必要な構成的エンカウンターの試みを報告されています。福原　泉先生は、「切れる」生徒への具体的対処法について紹介されました。いずれの論文も通常の学校での実践に多くの示唆を与えるものです。

つづく３編は養護学校における実践で、肢体不自由１編、知的障害２編で、上林宏文先生は真駒内養護学校の個別の指導計画における保護者との連携について、浅岡美晴・相馬敏先生は、東川養護学校における地域交流「地域に根ざした学校づくり」について、佐々木博充・青地せつ子先生は鷹栖養護学校高等部での重度・重複の障害のある生徒の QOL をめざした社会体験活動、余暇活動の実際を報告されています。いずれも養護学校の専門性をいかしたものです。

つづく 12 編は TEACCH プログラムに関わるものです。末光　茂先生は TEACCH プログラムを日本に早くに紹介され、岡山市における先進的療育活動に生かされています。時田睦美先生は、おしまコロニーつくしんぼ学級の実践について、星が丘寮の明庭和行先生は実習支援という地域生活に欠かせない実践について、道内最先端をゆく TEACCH 実践を報告下さいました。函館において畑中雅昭先生、谷川　忍先生は小学校特殊学級における IEP、TEACCH の手法を導入した実践で成果をあげられています。太田千佳子先生は北海道教育大学附属養護学校での TEACCH プログラム導入についてその成果を込めて報告されています。

続く５編は特殊教育特別専攻科生によるもので、愛育センターみどり学園との共同研究３編、市内特殊学級との共同研究２編です。前３編（小野久美氏・神野紋子氏・甲田裕子氏）は旭川校の TEACCH センターと呼ぶプレイルームで構造化された環境設定の中での関わりを中心に報告していて、3 ～ 4 歳の時期の個別の関わりの重要性をあらためて感じています。また、小学校でのかかわりは、TEACCH プログラムの持つ視覚的環境づくりの効果を再確認し（古賀いずみ氏）、一方で、自閉症児が情緒的成長を示す姿を見いだしています（鈴森玲子氏）。

つづく３編（湯藤瑞代氏・林幸寿枝氏・渡辺　恵氏）にも共通していることは、いかに丁寧な個別の対応が必要かということであり、逆に、今の学校教育環境、幼児教育環境のなかには、1 対 1 で楽しい時間を共にする時間が少なすぎるのではないかという素朴な疑問が生じてきました。

つづく 2 編は養護学校児童で、応用行動分析の手法を用いた実践（仁部さおり氏）、絵（自画像）を共に描きながら、絵を描く楽しみを追ったもの（八木沼みちる氏）です。

次の２編は学習障害に関するものです。家庭教師としてのかかわりをとおして、関わり手の肯定的否定的態度の子どもに及ぼす影響を論じたもの（片桐正敏氏）、学習障害をもつ弟さんについて、小さい頃からの家庭での取り組みについて、あるがままを述べたものです（工藤夕起氏）。工藤氏の文については、研究論文であることよりも、あるがままのもつ真剣さに学びたいと思いました。

小田切正先生の息の長いお仕事には、毎年感じることですが、私たちの見習うべき点と思います。

今回、はじめて文献紹介を入れてみました。この田村順一氏の論文が非常に示唆に富み、21 世紀の特殊教育の方向性を示すものと思われました。

振り返りますと、この 20 年を通して、私自身が一番育てられているという感じいたします。勿論自分の感じ方なので、他の方々の育ちに比べると、遅々として歩まずと言うべきかもしれません。育てられているという実感がありますし、ありがたく思うのです。年とともに人生が楽しくなっています。ただ、人様のためになっているかどうか、そのあたりについては、まったく実感が乏しいのです。いろいろ拝見してまして、育ってらっしゃると感動することも多いのですが、しかし、どうも私が関わったと思えることは多くないのです。残念ですが、これからさらに努力して役にたてるようになりたいと思います。

学んだことのいくつかを述べますと、私たちは、現場主義ともいうべき基本的考え方をもっています。すなわち、子どもに学び、現場に学び地域に学ぶことを第１にすることです。この精神はこれからも変わることはないと思います。

現場主義は一つの療育方法、教育方法のみにては対応しようとはしないで、いいものはすべて取り入れる姿勢があります。まずはじめに子どもありきです。方法が先にあるのではなく、子どものニーズが先にあります。「学校にあわせる教育から、子どもにあわせる教育へ」です。また、実践を通して、かかわり手の感性、感受性が深まっていかなければならないこと、はるか長い道のりとはいえ、かかわり手の人格の成長も問われるということです。教育は地域社会が核になること、子ども主体と遊びの尊重が求められています。専門家としてはっきりとものをいわなければならないこともでてきそうです。

今年度まなんだこととして、国・地方自治体の借金が国民一人あたり 500 万円になっていることの自覚を持つべき事、通常学級 40 人学級のままとどめたことの責任を感じ、行動を起こすべきこと、地方主義地域主義でいくべきこと、さらに草の根的に、地域住民の一人一人が、ともに手をつなぎながら、賢く愛情深くなっていくことが一番大切であり、国が豊かになることはこのことではないかということと思えます。20 世紀の「知への偏り」時代から、21 世紀は「情緒復元」の時代になるのではないかということを感じます。

最後になりましたが、例年１月は特殊教育特別専攻科生にとって特別な季節です。自分の論文を紀要原稿にまとめ、ワープロに打ち、一太郎に変換し、体裁を整えます。さらに投稿して下さった貴重な論文を製版用原稿に整え、校正し、最終原稿を印刷所に渡す、これを特専科生全員でするのです。その尽力に、心から感謝いたします。

2001 年 1 月 28 日
古川　宇一(Uichi Furukawa)

特殊教育特別専攻科第９期（情緒課程２０期）
小　野　久　美
片　桐　正　敏
神　野　紋　子
工　藤　夕　起
甲　田　裕　子
古　賀　いずみ
鈴　森　玲　子
仁　部　さおり
林　　幸寿枝
八木沼　みちる
湯　藤　瑞　代
渡　辺　　恵

北海道教育大学旭川校
障害児教育研究室
主任　古　川　宇　一
　　末　岡　一　伯
　　内　島　貞　雄
　　大　崎　功　雄